

FD の常識

天野 雅郎

1

昨今、大学の教員には「教養」の乏しい者や、まったく「教養」を欠く者が多い。——と言い出すと、最初から爆弾発言（bombshell announcement）を仕出かしているかのようで、いたって恐縮ではあるが、別段、喧嘩（ケンカ）腰ではないので、お間違えのないように願いたい。第一、このような物言いに対して反感を催したり、これ以降、この文章は読まい、という拒絶の態度を示すのは、そもそも自分に「教養」があるのか、ないのかに不安を感じており、あたかも自分のことを名指しで批判されているかのような勘繰（かんぐ）りをしている証拠であり、反対に、みずから「教養」が満ちていたり、溢れていたりする、と自認している側や、あるいは自分には、ほとんど「教養」の欠片（かけら）もありません、と嘯（うそぶ）いたり、不貞（フテ）腐れたりしている側から見れば、このような発言自体が、はなはだ穏当な、穏健な物言いであつたに、違いないのである。

9•

ところが、これを例えば、昨今、大学の教員には「常識」の乏しい者や、まったく「常識」を欠く者が多い、と言い換えたら、どのような反応が産み出されるのであろう。おそらく、こちらに対しては単純に、大きく二つの側に反応が分かれて、それほど面倒な混乱は生じないのではなかろうか。すなわち、一方においては常識を、文字どおりに「社会人として当然持っている、持っているべきだとされる知識・判断力」（『日本国語大辞典』2006年、小学館）と見なし、したがって、大学の教員も「社会人」であり、あらざるをえず……あらねばならない以上、いやしくも大学の教員が「常識」を兼ね備えているのは当たり前のことであり、大学の教員に仮に、昨今、そのような「常識」の乏しい者や、まったく「常識」を欠く者が多いとすれば、それは由々（ゆゆ＝忌々）しき事態であり、改善を要する点である、と憤慨する側が一定数、存在しているであろうことは疑いがない。

もっとも、これに対して一方で、もともと大学の教員には「常識」の乏しい者や、まったく「常識」を欠く者が多いのは、今に始まった話ではなく、決して悪いことでもなく、そもそも大学が「社会人」に求められる「常識」に左右され、支配され、そのような「常識」ばかりが大手を振って、大学のキャンパスを闊歩し始めたら、それこそ大学も終わりである、と考える側が一定数、逆に存在

しているであろうことも疑いがない。——とは言っても、そのような大学は遠（とお）の昔に、日本は疎（おろ）か、この地上からは姿を消しており、昨今の大学が「社会人」を養成するための、さながら職業訓練学校と化し、また、みずからが社会や政治や、なかなずく経済への迎合を標榜しているのであれば、もはや特定の基準に則った、一定の人間の型（パターン）を製造すること以外、大学に求められているものはなく、そこでは想定外の出来事さえ、それ自体が想定外なのである。

と言い出すと、いかにも逆説的で、不可解な言い回しのようなではあるが、もともと「万有の真相は唯（た）だ一言にして悉（つく）す、曰く「不可解」。我（われ）この恨（うらみ）を懷（いだ）いて煩悶（はんもん）終（つひ）に死を決するに至る」と書き遺し、あの日光、華嚴の滝から身を投じた、当時、いまだ数えの十八歳に過ぎない……^{ふじむらみさお}藤村操の言を俟つまでもなく、このようにして「万有の真相」は「不可解」の一言に尽き、そこに収斂せざるをえないのであり、それを「常識」の立場から「想定外」の一言に置き換え、呆然自失とすること自体が、逆に「社会人」としての「常識」を欠く行為である、と見なさざるをえないのではなかろうか。その意味において、そもそも大学と称される場に身を置く人間（いわゆる、大学人）には、もっぱら「社会人」の「常識」に包含され、内包される「常識」とは、違う「常識」が求められている、とも評さざるをえないのである。

◆ 10

2

ところで、この「常識」という語は元来、儒教用語として、私たちの国でも長い間、使い続けられてきた語ではあったが、この語が現在のような形で用いられるに至るのは、明治十四年（1881年）に当時の「東京大学三学部」（すなわち、法理文三学部）から刊行された、井上哲次郎^{いのうえてつじろう}を中心に編纂された『哲学字彙』が初出であった。したがって、その成り立ちに即して言えば、この語は近代的な日本語として、翻訳語としてスタートを切ったことになり、この語の裏側には絶えず、英語のコモン・センス（common sense）が貼り付いていたことになる。——そして、その二重写し（overlap）の関係に変化の兆しが生じるのは、ほぼ今から百年前の、明治（四十五年）から大正（元年）へと年号の切り替わる、1912年のことであり、この段階に至って、ようやくコモン・センスには「常識」以外の多様な訳語（通識、普通感、普通感覚、普有感覚）が姿を見せることにもなるのである。

言い換えれば、それは丁度、私たちの国に「教養主義」（いわゆる、大正教養

主義)の風が吹き始める頃であり、例えば当時の「三教養書」と目されていた、^{にしだきたろう}西田幾多郎の『善の研究』は明治四十四年(1911年)に出版されており、^{あべ}阿部次郎の『三太郎の日記』は大正三年(1914年)に、^{くらたひやくぞう}倉田百三の『愛と認識との出発』は大正十年(1921年)に、それぞれ刊行されている。要するに、それは私たちの国が明治維新以降、一辺倒に推し進めてきた、近代化(Modernization)という名の西洋化(Westernization=Europeanization)に一つの到達点が浮かび上がり、そこに^{いしかわたくぼく}石川啄木が、あの「時代閉塞の現状」(明治四十三年→1910年)と名付けた、息苦しい閉塞感をも伴いながら、まさしく人類史上、最大の惨事(カタストロフ)であり、また、やがて20世紀が「戦争の世紀」と称される所以の「世界戦争」(World War)へと……世界が転がり落ちていく、その前後の時代でもあった。

言ってみれば、そのような「戦争の世紀」の産物として、私たちの前に姿を見せたのが「教養主義」であったことを、この場で私たちは、あらためて振り返り直しておく必要がある。なお、その際に「教養」には大きく、一方で英語のカルチャー(culture)と、一方でドイツ語のビルドゥング(Bildung)の、二つの異質な、別々の起源が抱え込まれることにもなった訳であり、そのこと自体が私たちの国において、現在に至るまで「教養」という語の不分明さや、不可解さの原因になっている点も、見逃されてはならない。——が、少なくとも「教養」という語が当時、英語のカルチャーであれば「修練、文化、人文、禮文、禮脩、修養」という訳語を、ドイツ語のビルドゥングであれば「形成、構造、文化、禮文、禮脩、修養、修整、教育、涵養、薰陶、陶冶、養成」という訳語を、それぞれ『哲学字彙』の第三版(『英獨佛和・哲学字彙』)が挙げ、連ねていたことは重要である。

11♦

言い換えれば、このような多様な訳語が漸次、さながら「戦争の世紀」と歩調を合わせるかのように、英語のカルチャーであれば「文化」という訳語へと、ドイツ語のビルドゥングであれば「教養」という訳語へと、共通の制服(uniform=同一形式)を身に纏うことになっていくのが、ほぼ今から百年前の、私たちの国の趨勢であった。そして、その制服の代表は言うまでもなく、官服や軍服や、あるいは皮肉なことに、その本来の語義とは裏腹の、いわゆるスポーツ(sports→disport=余暇・遊戯・娯楽……)選手の着る「ユニフォーム」へと、画一的で統一的な、いっさいの揺らぎ(fluctuation=波動)を許さない姿で、固定化をされるのであって、この段階に至って、ようやく「教養」は「スポーツ選手が、自分の所属するチーム、団体を明示し、他との識別を容易にするために着る揃いの運動着」(『日本国語大辞典』)に等しいものとなり、それこそ「常識」と化した次第。

ところで、今回の本誌の特集は、いわゆる FD (「FD とは」) である。が、この FD を、そもそも何と読むのか、よく分からない教員が目下の大学には存在しているのか、どうか——それ自体が見様によっては、はなはだ興味深い、大学の教員の「常識」なのではなかろうか、と推察されうるし、それが一方で、事務職員にとっては「常識」なのか知らん、あるいは学生にとっては「常識」なのか知らん、と問い出すと、いよいよ事態は興味深い様相を呈してくるに違いない。けれども、この場では対象を一応、教員に絞っておくと、例えば 20 世紀の、1980 年代までの大学で、この問いを教員に投げ掛けてみれば、おそらく「常識」のある、それどころか「教養」のある教員は、これを信仰の擁護者や護教者のラテン語表現 (Fidei Defensor) の略語 (Fid. Def. → F.D.) であり、英国の国王の尊称の一つ (Defender of the Faith) と答えるのが、それこそ「常識」であったはずである。

ところが、このような回答を現在の、大学の教員に期待するのは無理であり、酷であるばかりか、そこにアメリカの消防署 (Fire Department) の略語を想定したり、光学用語や写真用語の「焦点距離」(focal distance=focal length) の略語を想定したりすることさえ、目下の大学の教員には、かなり難しいのではなかろうか。せいぜい、それは郵便物の、無料配送 (free delivery) の略語であったり、あるいは、その手の趣味の持ち主であれば、フリー・ダイヴァー (free diver) やフリー・ダイビング (free diving) の略語であったり、それとも古色蒼然とした、フロッピー・ディスク (floppy disk) の略語であったりするのが落ちである。……と、このような用例が掲載されているのが、1980 年代の大学の教員の机の上には、それこそ「常識」のように置かれていた、研究社の『新英和大辞典』(第五版) であり、この英和辞典が刊行されるのは、ちょうど 1980 年のことであった。

もちろん、そこにフロッピー・ディスクは載っていないし、翻れば、やがて USB メモリーも SD カードも、載らないことになる訳である。が、このような用例を並べてみると、いかに私たちの「常識」が時代に左右され、下手をすると十年刻みで、それどころか数年刻みで変化をし、変化をせざるをえないものであるのか、が、ご了解いただけるはずである。と言うことは、目下、21 世紀の最初の十年 (decade) が過ぎ、世の中の大半の英和辞典には、この語の後に続けて、いわゆる「デカダンス」(decadence= 頹廢) という語が置かれているのであるが、その——はなはだ官能的で耽美的な、芸術運動も功を奏さず、どんどん世界が、やがて「世界戦争」という名で呼ばれることになる、禍々 (まがまが)

しい破局（catastrophe= 転倒）へと向かって突き進んでから、ちょうど百年目の転機（ターニング・ポイント）に立たされているのが、今の私たちの、歴史上の位置付けなのである。

と言うことは、そのような歴史上の位置付けに立って、おそらく現在の大学で、ほとんど「常識」と化しているであろう、その際のFDとは、はたして何であり、また、何であらねばならないのかが、まず問いの俎上に載せられる必要がある。無論、そこに昨今の大学の、呆れ返るほどに「常識」のある教員は、実に容易に、何の躊躇（ためら）もなく、英語のファカルティー・ディヴェロプメント（Faculty Development）の略語を想定し、それを「エフディー」会議や「エフディー」活動と、口々に呼び合うのが常であるが、その時、この「エフディー」とは「教員が授業内容・方法を改善し向上させるための組織的な取組の総称。その意味するところは極めて広範にわたるが、具体的な例としては、教員相互の授業参観の実施、授業方法についての研究会の開催、新任教員のための研修会の開催などを挙げることができる」……という以上の意味を、超えていないのが実情である。

4

13♦

このようなFDの定義（「教員が授業内容・方法を改善し向上させるための組織的な取組の総称」）は、そのまま平成十七年（2005年）の、文部科学省（中央教育審議会）の答申（「我が国の高等教育の将来像」）に則ったものであり、よほど性根の坐った大学や、その構成員（教員・事務職員・学生）ではない限り、このようなFDの取組を蔑（ないがし）ろにしたり、無視したりすることは不可能に近い。したがって、この時点から数えても、すでに丸々十年（decade）の時が経ち、逆に、このような種々の取組（「教員相互の授業参観の実施、授業方法についての研究会の開催、新任教員のための研修会の開催」）に無縁の大学を探すことは困難な状況にあるはずである。——ところが、それにも拘らず、相も変わらず大学の内外では、繰り返しFDの声が叫ばれ続けている訳であって、そのこと自体が、いたって奇妙な事態であることを、さしあたり認識しておくのは無駄ではない。

また、このようなFDの定義に則りながらも、この語が英語（と言うよりも、米語）のファカルティー・ディヴェロプメント（Faculty Development）の略語であるからには、この語の照準が学部や学科や、要するに、まさしく「ファカルティー」に向けられていたことも、見逃されてはならない。言い換えれば、このファカルティー・ディヴェロプメントという語によって、当面の目標とされてい

たのは、大学全体の教員組織の再編（「大学が、人材育成と学術研究の両面において、本来の使命と役割をより積極的かつ効果的に果たしていくためには、常に教員組織の在り方が最も適切なものとなるよう努力していくことが必要である」）でもあって、その結果、以前の教授・助教授・助手の制度が、現在の教授・准教授・助教の制度に改められ、かつ「具体的な教員組織の編制は、各大学が自ら教育・研究の実施上の責任を明らかにしつつ、より自由に設計できるように」もなった次第。

ちなみに、この答申の中で、このような学部や学科の上に成り立ち、いささか大仰に、辛辣に言えば、ヨーロッパの中世における大学（universitas）の誕生以来、そのような成り立ちの上に胡坐を掛いてきた「専門教育」と並んで、大学教育の二本柱の役割を果たしてきた「教養教育」は、どのような改変を迫られたのであろうか。ご参考までに、以下に引いておく。——「新たに構築されるべき「教養教育」は、学生に、国際化や科学技術の進展等社会の激しい変化に対応し得る統合された知の基盤を与えるものでなければならない。各大学は、理系・文系、人文・社会・自然といった、かつての一般教育のような従来型の縦割りの学問分野による知識伝達型の教育や単なる入門教育ではなく、専門分野の枠を超えて共通に求められる知識や思考法等の知的な技法の獲得や、人間としての在り方や生き方に関する深い洞察、現実を正しく理解する力の涵養に努めることが期待される」。

と、このように振り返ってみると、それは和歌山大学に教養教育改革の嵐（あらし＝荒風）……と言いたい所ではあるが、残念ながら、ソヨソヨとした春の風や、ヌルヌルとした夏の風が吹き始めた時期と、ちょうど軌を一にしていたことも想起されよう。そして、それが本来の、ようやく野分（のわき＝颶風）の姿に変わるのは、ちょうど和歌山大学が創設六十年（すなわち、還暦）を迎えた年（2009年）の出来事であった。それ以降、遅れ馳せながらも和歌山大学は、そのまま文部科学省の答申を踏まえる形で、いわゆる「理系・文系、人文・社会・自然といった、かつての一般教育のような従来型の縦割りの学問分野による知識伝達型の教育や単なる入門教育」を改め、これに代わる「教養の森」科目群を創出し、おそらく日本中の、あるいは世界中の、どの大学にも存在しない教養科目の再編や、新しい教員組織を通じて構成される、独自のセンターを創設し、現在に至る。

は」)を掲げたこと自体、釈然としない思いが、残らないではない。が、和歌山大学に「教養の森」センターが創設され、まるまる三年を経過した現在、そこに籍を置く教員の一人として、また、おそらくFDとは、このような事態を指し示し、逆に、このような事態以外のものを指し示すのではない、という確認を込めて、ひいては幾つかの、自戒や反省も含めて、以下に先刻の、文部科学省の答申の一文の、続きを引いておくことにしたい。——「このような観点から、教養教育に携わる教員には高い力量が求められる。加えて、教員は教育のプロとしての自覚を持ち、絶えず授業内容や教育方法の改善に努める必要がある。入門段階の学生にも高度な知識を分かりやすく興味深い形で提供したり、学問を追究する姿勢や生き方を語ったりするなど、学生の学ぶ意欲や目的意識を刺激することも求められる」。

さて、いかがであろう。この一文を読む限り、もともとFDとは大学の教員にとって、いたって単純な、はなはだ当然の態度や、それこそ日常の、心掛けや心構えの問題であり、これを柔らかい、やまと言葉の言い回しで置き換えれば、それは一種の「たしなみ」であった訳である。また、この「たしなみ」に漢字表記を宛がえば、それが「嗜好」の「嗜」(漢音→シ、呉音→ジ)となることから窺えるように、それは「深い味の〔、〕ごちそうを長い間〔、〕口で味わうこと」(『漢字源』2006年、学習研究社)を意味しており、そうであるからこそ、この漢字が「老」(としより)と「旨」(うまい)の会意文字である「耆」(漢音→キ、呉音→ギ)から組み立てられ、そこには「長く年がたって〔、〕深い味のついた意を含む」(同上)ことが、必然的に要求され、要請せざるをえなかったことも、おのずから明らかな事態であったはずである。嗜学や嗜書や……嗜酒のように。

その意味において、と繰り返そう。FDとは、この語に「エフディー」という、いかにも「たしなみ」を欠いた呼び名を貼り付けたり、おそらく何時まで経っても、どうてい日本語とはなりえず、したがって、日本人の思考方法や感情表現や、あるいは意志決定には馴染みえないであろう、ファカルティー・ディヴェロプメント(Faculty Development)という語を、使い続けたりするよりも、はるかに自分たちの社会や文化や、生活の実態に即した、例えば「たしなみ」という語の伝統に立ち返り、これを日常の中に呼び戻す方が、目下の大学には得策であり、急務であったのではなからうか。ちなみに、この語の語釈を『日本国語大辞典』で調べると、そこには次のように述べられている。——「①芸事などに親しむこと。②日頃の心がけ。そのものとしての、立場の心得。用意。覚悟。③つつしみ。節制。④身を飾ること。おしゃれ。身だしなみ。⑤嗜好品などを適度に口にする」。

昨今、このようにして大学の中には、いろいろ自分たち（すなわち、教員と事務職員と学生）の「たしなみ」に、そぐわず、それどころか、それが結果的に自分たちの、間尺（ましかく）にも合わない、困った事態が生じているのではあるまいか。極言をすれば、その最たるものがFDである……という言い方をすることも出来るであろうが、それは翻れば、先刻の『日本国語大辞典』の語釈の通りに、このような困った事態を逃れ、自分たちの本来の、好ましい方向へと自分たちを導く、道筋も示されていることになる。すなわち、それは単純に、自分たちが「芸事などに親しむこと」を最優先し、そのことを「日頃の心がけ。そのものとしての、立場の心得。用意。覚悟」と考え、その際の「つつしみ。節制」を忘れず、しかも「身を飾ること。おしやれ。身だしなみ」を大切にして、あえて「嗜好品などを適度に口にすること」も重要である、という「常識」に立ち返ることである。

6

さて、このようにして振り返ってみると、いかに昨今の大学が「常識」を欠き、それと共に「教養」を欠く場所であるのかが、判然としてくる。——が、それは先刻来、繰り返し、述べてきたように、単に大学という場所（place）の問題ではなく、そこに集う、教員も事務職員も学生も含めて、大学の構成員（すなわち、大学人）の全体の、相互の人間関係（human relations）の問題であり、それは要するに、文字どおりの「コミュニケーション」の問題である。と書き継いで、ふと想い起こしたのが丸山眞男^{まるやま さお}の、あの『日本の思想』（1961年、岩波新書）であったのであるから、驚きである。と言ったのは、この本の中に収められている、例の「ササラ型」と「タコツボ型」という語で有名になった、彼の講演（「思想のあり方について」）は結果的に、昭和三十二年（1957年）の「岩波文化講演会」の席上で催されたものであって、今を遡ること、五十八年も昔の講演であったはずである。

ところが、はなはだ興味ぶかいことに、この……言ってみれば、還暦近い講演において丸山眞男が述べていることは、実は昨今の、日本の社会や文化や、大学にこそ当て嵌まる問題であり、彼の言う「タコツボ化」を「閉ざされた社会」（クローズド・ソサエティ）と置き換えれば、これが「日本の場合に注意しなければならないことは、現在の日本全体としては必ずしもクローズド・ソサエティではない、それどころか日本全体としては、八方破れで、世界中に向って開かれている。そこで日本の国内の集団がタコツボ化して、それぞれのタコツボ化した集団がインターナショナルには外に向って開かれていることになる。つ

まり日本自身はクローズド・ソサエティのように横に等質的なコミュニケーションがなくて、かえって〔、〕それぞれの集団がそれぞれのルートで、外のインターナショナルなルートとつながっている、という非常に奇妙な状況が見られる」という点である。

なお、この一文には「国内的鎖国と国際的開国」という、これまた印象ぶかい小見出しが冠せられているが、このようにして現在、日本の大学が「非常に奇妙な状況」に立ち至り、そこにスッポリと陥ってしまっているのは、疑いのない事実であり、したがって、そこに相互のコミュニケーション（communication=通じ合い）が成り立っていないのも、火を見るよりも明らかであろう。しかも、その際の「タコツボ間を〔、〕つなぐように見える唯一のコミュニケーションが〔、〕いわゆるマス・コミュニケーションということになってくる」と、そのような「マス・コミュニケーションの〔、〕まっただ中におけるディス・コミュニケーション——コミュニケーションの無さ」が顕在化して、きわめて逆説的な、矛盾に満ちた構造が姿を現（あらわ=露・顕）し、この双方が「同時に高度になり、互いに因果をなして強めあうという結果になる」のも、丸山眞男の言った通りである。

言い換えれば、このようにして「一方では言語不通からして共通の広場を持つ〔、〕というようなことが盛んにいわれながら、しかも他方ではマス・コミュニケーションによる驚くべき思考や感情や趣味の画一化、平均化が進行している。民間放送が幾つできてても放送内容は〔、〕どれも大体おんなじものになってしまう。ある時間にダイヤルをまわすと〔、〕どこの局でも歌謡曲をやっているし、また浪花節をやっている。放送や新聞の個性が乏しいという点では典型的な大衆社会といわれるアメリカよりも、日本の方が〔、〕はるかに甚だしい」という事態さえ、招来することになる。そのような事態を、丸山眞男は「戦前の日本」の「天皇制」や、それを産み出した「義務教育や軍隊教育」や、そこから注入された「臣民」意識に、淵源を求めているけれども、はたして今、大学で大手を振って歩いているFD（エフディー）が、それに連ならない保証は……あるのだろうか。

17♦

丸山眞男の『日本の思想』から、いささか長文の引用が続いてしまい、恐縮であるが、そもそも「日本の大学」が戦前、いわゆる「旧制大学」としてスタートを切ったのは、明治十年（1877年）の東京大学が最初であり、これが漸次、ほぼ十年後（明治十九年→1886年）には帝国大学となり、また十年後（明治三十

年→1897年)には東京帝国大学となり、やがて大正七年(1918年)の大学令によって、さらに官立大学と公立大学と私立大学を含めて、戦前の「旧制大学」の顔触れは出揃うことになった。——その意味において、結果的に「日本の大学」は、ふたたび丸山眞男の言葉を借り受ければ、ちょうど「ヨーロッパでは社会の組織の上にも、あるいは文化形態の上にも、専門家現象、つまり分業とスペシャリゼーションが急速に進んだ時代」の大学であり、そのような「大学」(university)を、その語義に即して言えば、きわめて言語矛盾に近い形で、私たちの国は輸入した次第。

おそらく、このような「大学」の輸入の歴史は、今度は戦後になって、いわゆる「新制大学」が昭和二十四年(1949年)にスタートを切り直してから、ほとんど変わらない状態で、せいぜいヨーロッパ風(European)かアメリカ風(American)か、という程度の、わずかにコーヒーの濃さや薄さの、違いを浮き上がらせる程度の言い回しで、繰り返されたのではあるまいか。したがって、そこには古代から中世へと、近代へと受け継がれた、実に「長い〔、〕共通の文化的伝統が根にあって」、その「根」(ルーツ)から学問が、あたかも植物の茎や枝へと、葉や花へと「分化」を遂げている……そのようなヨーロッパの大学の、学部や学科とは決定的に異なる、まさしく「日本の大学」の特徴が産み出されることになる。そして、そのようなヨーロッパの大学と「日本の大学」を比較して、あの「ササラ型」と「タコツボ型」の区別を、ここで丸山眞男は持ち出している訳である。

しかも、それは同時に「初めから非常に個別化された、専門化された形態で近代の学問が入ってきたために、学者というものは〔、〕そういう意味の専門家である、個別化された学問の研究者である」という事態が、ほとんど私たちの国では疑問視されることなく、それが「当然の前提になった」ことをも意味している。——言い換えれば、それは「ヨーロッパの学問の根底にあって、学問を支えている思想あるいは文化から切り離され〔、〕独立に分化し、技術化された学問のワクのなかに、はじめから学者がスッポリはまってしまった」ことを指し示しているし、それは大学の教授でも、あるいは助教授(→准教授)でも助手(→助教)でも、これらの「学問研究者が相互に共通のカルチュアやインテリジェンスでもって結ばれていない。おのおのの科学を〔、〕ほり下げて行くと共通の根にぶつからないで、各学科が〔、〕みんなタコツボになっている」ことを暴き出している。

翻れば、そのような「タコツボ」状態から逃れるために、もともと大学の、学部や学科や、ひいては学問全体に求められているのが、丸山眞男の言う「カルチュア」や「インテリジェンス」であり、日本語に置き換えれば、それが「文

化」であり「教養」であり、さらには「知性」であったことになるであろう。すなわち、このような形で「日本の大学」に乏しく、下手をすると、そこに抜け落ちている「知性」とは、その原義（intelligence= 中間選択能力）の通りに、みずからの個別化し、専門化し、要するに、科学（= 特殊科学）化した頭の使い方を、可能な限り……離れ、お互いのコミュニケーションの場へと、ひとりの人間として、歩み入ることであり、そのような努力や熱意や、言ってみれば、ひとりの「人間になるための教育」を、みずからが一人の学生となって受けることであり、そのような行為の総体を、大学はFDと、慎重深く、控え目に呼べば充分なのである。